

指導資料

特別支援教育 第188号



鹿児島県総合教育センター
平成28年10月発行

対象
校種

幼稚園 小学校 中学校
高等学校 特別支援学校

特別支援学級における学び合い活動の工夫

特別支援学級では、個別の指導とともに児童生徒の実態に応じて学び合い活動を取り入れて、社会性の育成等、様々な力を育むことが求められている。そこで、特別支援学級における学び合い活動の意義と、実践例を基にした具体的な進め方について紹介する。

1 学び合い活動の意義

特別支援学級において、他者と関わりをもつことが得意ではない児童生徒であっても、遊びの時間や何気ないやりとりの中で、教師の手を引いたり、友達に近づいたりする姿を見ることがある。障害の種類や程度により、他者と関わることにそのものに配慮しなければならない場合もあるが、多くの児童生徒は他者との関わりを自分なりの表現方法で求めているのである。

特別支援学級における学び合い活動では、児童生徒が生活する中に存在する問題や将来遭遇するであろう問題などを解決すべき課題として設定することが多い。そのため、学校という社会的な関わりを学ぶ場における学び合い活動の意義は大きい。

また、「学校の意義」については、中央教育審議会の教育課程企画特別部会における論点整理（平成27年8月）において、次のように述べられている。

資料 中教審教育課程企画特別部会 論点整理

学校とは、社会への準備段階であると同時に、学校そのものが、子供たちや教職員、保護者、地域の人々などから構成される一つの社会でもある。子供たちは、学校も含めた社会の中で、生まれ育った環境に関わらず、また、障害の有無に関わらず、様々な人と関わりながら学び、その学びを通じて、自分の存在が認められることや、自分の活動によって何かを変えたり、社会をよりよくしたりすることなどの実感を持つことができる。

(※ 下線は執筆者による。)

このようなことから、児童生徒の日常生活の大半を占める学校において、担任や学級の友達と一緒に学ぶ学び合い活動の意義は大きいと言える。

2 学び合い活動を成立させるための工夫

(1) 個に応じた指導の工夫

担任が学び合い活動のよさを理解していても、児童生徒の実態を考慮せずに授業を構成してしまうと、児童生徒にとっ

ては目的の定まらない学習になってしまう。その結果、児童生徒が感情をコントロールできずに離席したり、パニックをおこしたりすることもある。

そこで、大切にしたいことは児童生徒一人一人の実態に応じた指導である。具体的には、各種心理検査によって得られた結果や日常の行動観察等を基に把握した、当該児童生徒の認知特性に応じた授業を行うことである。こうした授業を繰り返し展開することで、児童生徒の「できる状況」が確保され、児童生徒は自ら課題意識をもって主体的に学習に参加できるようになると考える。また、児童生徒にコミュニケーションスキルを身に付けることも大切である。自分の思いが相手に伝わる喜びを味わわせながら、個と個がつながる学び合い活動へと発展させたい。

それでは、以下に、認知特性に応じた指導によって、学習を進めるための情報を読み取ったり、書かれた文字や写真等の情報から行動に移したりできるようになった指導の工夫例を紹介する。

ア 生活単元学習

「まちをたんけんしよう」

<児童の実態>

A児：物事を時系列に捉えて処理をする（継次処理優位）。

B児：物事の全体像を捉えて処理をする（同時処理優位）。

<工夫例>

A児はクラスで近くの公園に行くことを言葉で知らせても、学習の見通し

をもつことができずに情緒が安定しないことが度々あった。そこで、図1のようなカードを準備してスケジュールを示すことで、情緒が安定し、最後まで活動に参加できた。














まちをたんけんしよう		
1	がっこうをでる	 →  →
2	こうえんにつく	→  → 
3	あそぶものをえらぶ	  
4	みんなであそぶ	
5	あとかたづけをする	
6	こうえんをでる	 →  →
7	がっこうにつく	→  → 

図1 スケジュールカード

一方、B児は図1のような順序性をもった表と文字だけの情報では学習の見通しをもつことができず、活動に参加することができなかつた。そこで、図2のような簡易地図を作成し、地図上を指でなぞって確認すると、学習の見通しをもつことができ、目的地でも安心して活動し、安全に帰校することができた。

このような認知特性に応じた指導により、当該児童は集団での校外学習を不安なく過ごすことができた。

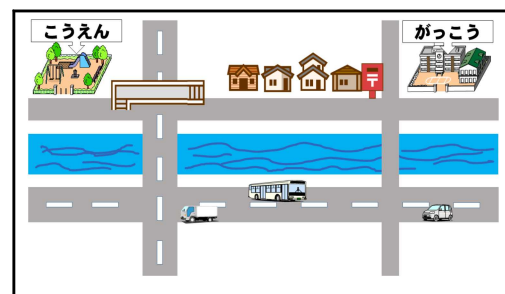


図2 公園までの簡易地図

イ 日常生活の指導（当番活動）

<児童の実態>

C児：文字（平仮名）を読むことができるが自発語はない。

<工夫例>

当番活動では、自分の当番の活動内容が書かれたカードを読み上げてから活動に移るようにしていたが、C児は読み上げだけでは活動に移ることが難しかった。そこで、視覚化した活動内容の情報（当番活動の写真）と読み上げの音声を結び付けるための支援ツールとしてVOCA[※]を使用した。すると、自ら読み上げて行動することができるようになった（写真1）。この指導により、集団の場において自分の要求を担任に伝えようとし、少しずつ自発語も増えた。



写真1 VOCAを使って活動する児童

※ Voice Output Communication Aidの略

(2) 個と個がつながることを意図した指導の工夫

各教科等の授業で学び合い活動を成立させるためには、個と個がつながることの喜びを感じられ可能性のある教材・教具を児童生徒の日常の遊びや興味・関心の中から見だし、児童生徒が身に付けた知識と関連付けて、学び合いにつないでいくことが大切である。

以下に、遊ぶための道具をクラス全員が使えるような場に意図的に置くことで、個と個がつながるきっかけになったり、

児童生徒同士が基本的な言葉のやりとりを繰り返すことで、学び合いのためのコミュニケーションの基礎を培ったりすることができた指導の工夫例を紹介する。

ア 遊びの指導

<児童の実態>

D児：パソコンに興味があり、熱中すると独り占めすることがある。

<工夫例>

遊びの指導等に、D児に自由にパソコンを使えるような場を意図的に設定した。すると、その他の児童がD児の周りに集まり、パソコン画面に注目して、その移り変わりを楽しんだり、D児のパソコン操作に注目したりする姿が見られた。中には、友達（人）の集まりそのものに興味を抱いて、集団の中に自分の身を置くことにうれしさを感じている児童もいた。その後、D児は周りに友達が集まっていることを意識し、「どうぞ。」と自分から席を譲ることができた。このように、ある教材・教具を媒介として個と個がつながり、児童生徒が互いのよさを感覚的に捉え、学び合いにつながるきっかけを醸成することができた（写真2）。



写真2 パソコンを媒介に個と個がつながる様子

イ 国語科

「メッセージを読もう」

<児童の実態>

E児：平仮名で書かれた文を一人で読んだり、担任の模倣をして読んだりすることができる。

<工夫例>

平仮名や片仮名、数字が混在する文章を声に出して読むことができるように、板書した文章を読む活動を取り入れた。その際、児童に担任の役割をさせて、児童同士で学習を進めることができるようにした。その結果、担任、児童の簡単な会話ができるようになり、担任の指示に基づいた行動もできるようになった（写真3）。



写真3 音読活動を通じたコミュニケーションスキルの育成

3 実践例

これまで述べた指導の工夫を日々の授業で取り入れ、そこで培われた力を活用した、小学校特別支援学級の生活単元学習での学び合い活動の実践を紹介する。

(1) 単元名

「仲よし合同進級を祝う会をしよう」

(2) 児童の実態

2～5年生の男児5人。全員が知的障害を伴う自閉症である。自己紹介等で自分の名前を言うことはできるが、他者を

意識して、自分の好きなことなどを話すことに課題がある。

(3) 実際

手立て①「互いの考えを共有する場の工夫」

自分が何を楽しみにしているのか、何が好きなのかなど、共有化が図られるようにする。

手立て②「実態を考慮した発問や指示の工夫」

他とつながることの課題を明らかにし、児童の要求に合わせた支援をする。

1 自己紹介をする意義を押さえ、めあてを確認する。

手立て①

名前を言うだけの自己紹介をして、もっと様々な話をする中で、聞いている側もうれしい気持ちになることをイラストで示す。

2 自己紹介で話す、自分の好きなことなどは何かを会話や掲示物で確認する。

手立て①

好きなことを思い出せない場合は、教室に掲示しておいた「自己紹介カード」で振り返らせる。

手立て②

特に他者とつながることに課題のある児童には、友達からの助言（カードの読み上げ）で自己紹介ができるようにする。

3 「宝物ボックス」から自分の好きなものを取り出して自己紹介をする。

手立て①

自分のことを分かりやすく、表情豊かに表現できるように、担任が児童一人一人の好きなものを入れた「宝物ボックス」を準備し、それを使って自己紹介させる。

<児童の反応>



やったあ。僕の好きな風船だ。

僕の名前は〇〇です。風船バレーが大好きです。

手立て①と②

<個と個が繋がったことを体感する場>

風船バレーが好きだと発表した児童は、目の前にいる友達に風船をパスし、友達もそれに応えて風船をパスして返すことができた。

「宝物ボックス」の中を見た途端、児童の表情が明るくなり、これまでよりも生き生きとした自己紹介をすることができた。聞き手も話し手を見て、互いに自己紹介の場を楽しむことができ、個と個が繋がる学び合いが成立した。

4 本時を振り返り、「進級を祝う会」への意欲を高める。

教師による意図的、計画的な指導により学び合い活動は成立する。個々の力をしっかりと把握して伸ばし、充実した学び合い活動を展開していただきたい。

—引用・参考文献—

- 中央教育審議会教育課程企画特別部会における論点整理について（報告）平成27年8月（企画課）